

令和5年3月15日

地域住民による「学びの里山」整備事業報告書

南魚沼環境・野外教育研究会 代表 西野仁

はじめに

本プロジェクトは、「(一財)新潟県建設技術センター」の助成を受け、3年間、続けてきた活動です。最初に、この3年間の活動期間中において、軽微な虫刺され、切り傷程度はあったものの、特に報告すべき事故やケガ、クレーム等は知り得る限りなかったことをまずは報告します。

初年度の令和3年度は地元の森林公園管理組合と南魚沼環境・野外教育研究会が、令和4年度以後は南魚沼環境・野外教育研究会が事業主体となり事業を継続してきました。

具体的には、古いため池を囲むようにぶなや、こなら、ほうのきなどが自生する林を、散策できる程度に伐採・下刈りし、多様な自然観察ができるよう小径、階段、木橋等を整備し、さらにそこでの教育プログラムを開発・展開することをめざしました。行政主導ではなく、SDGsを意識しつつ住民を主体に地域活性化を継続的にめざす具体的アクションです。

初年度の令和3年早春、1メートル以上の残雪の山に入り、ドローン映像の助けを借りながら、ルートを決める作業からスタートしました。雪融けを待って、伐採や草刈りなどを続け、ほぼ3年間かけて、外周道路、小径、木橋・木道、広場などの建設、看板類の設置の他、かつて米作りをしていた「山田」を復元し、カヌーやボートの栈橋も整いました。また、エリア内に生息する動植物の調査も進み、これらを使って、令和5年からは小中学生を対象に、四季の特色を活かしたデーキャンプ「里山塾」を開催し、好評を博しております。

本報告は、3年継続の最終年度であり、3年間継続してきたプロジェクトをまとめるとともに、3年目の活動報告でもあります。

本報告の構成は、次のとおりです。

- 1, 「学びの里山」プロジェクトがめざすこと
- 2, これまで(令和3年度、4年度)の取り組みの概略
- 3, 令和5年度の取り組み
- 4, 3年間の総轄 「出来たこと、出来なかったこと」
- 5, これからの展望

添付資料 「南魚沼 学びの里山全体図」

1, 「学びの里山」プロジェクトがめざすこと

現代社会は、政治も経済も、外交も、教育も余りにも皮相的な、混沌、混乱、秩序無き状態がまん延しており、いわゆるカオスの状況を呈していると言えましょう。カオスの逆はコスモスです。コスモスは秩序を表すギリシャ語です。古代ギリシャの哲学者ピタゴラスが初めて用いたとされ、「宇宙」を意味したとのことです。確かに北極星を中心に星たちが秩序正しく円運動する写真を見ると、宇宙は何と秩序正しいことかと感じます。カオスの状況が露呈している現在、強く惹かれるのは、きちんと秩序があり、動く気配がない「宇宙」つまりコスモスです。星が集まる「宇宙」だけでなく、自然の生態系、人体などもコスモスととらえることが出来るでしょう。身近なコスモスとしては、山や川、平野など地勢（地理的事象の配置のありさま）があげられます。「学びの里山」から望む八海山・越後駒ヶ岳・中野岳、そして巻機山、遠くの苗場山や上信越国境の山々やそこを流れる魚野川の地勢はそう簡単には変化しそうな秩序あるコスモスです。今から 50 年ほど前に、五日町スキー場の中腹のグリーンハウス前の芝生広場から見た山並みや魚野川は、今も、変わっていません。時期や時間、天候によって見え方や感じ方は違いますが、そこにある地勢は簡単には変わりません。秩序が安定していて、よほどの天変地異でもない限りは動きません。それがゆえにコスモスを感じるのです。

変化が激しく、不安感がぬぐえない状況の中で、びくともしない安定感や存在感を実感する機会を用意し続けることは「学びの里山」にまず期待することです。さまざまなコスモスに直感的に触れ、感じることで、漠たる不安を鎮め、安定状態を醸成し、心穏やかに暮らすことを強く期待します。それはまた、人を科学や哲学などの思索の道へと誘うきっかけになるのではないのでしょうか。

IT や AI など最新技術が次々に開発され、サイバー空間が広がるにつれ、住民の暮らしと関心は自然から遠ざかりつつあるように感じます。CO2 の削減に代表される環境問題を解決するためには、人々が自然に触れる機会を増やすことが肝要です。特に未来からの留学生である子供たちに、木や鳥や虫や動物が棲む里山の魅力を体験して欲しい。そのためには、身近な里山を「学びの場」として整え、そこでの体験学習の機会を提供し続けねばなりません。しかし、市内には観光客向けの施設は散見するものの、地域住民が手軽に訪れることのできる整備された里山は身近にはありません。そこで、今まで放置されてきた里山を環境教育に資するよう地域住民の手で整備することに着手し、それをさらに継続・充実させ、そこを使って実際の教育プログラムの企画・運営をめざします。加えて、その「学びの里山」は「共同体感覚」が溢れるところであってほしい。誰かが「富」を独占するのではなく「共有」を旨とし、「共生」することをコンセンサスにして欲しいのです。ここでは、利己的ではなく利他的な振る舞いを期待します。



2, これまで（令和3年度、4年度）の取り組みの概略

令和3年度

残雪時に、外周道路等の踏査を実施し、ルートを探った。初夏に塵荒れ放題だった林に入り、ルート上の樹木の伐採や下刈作業、重機で障害物を取り除くなどし、基幹となる歩道と広場などを整備した。



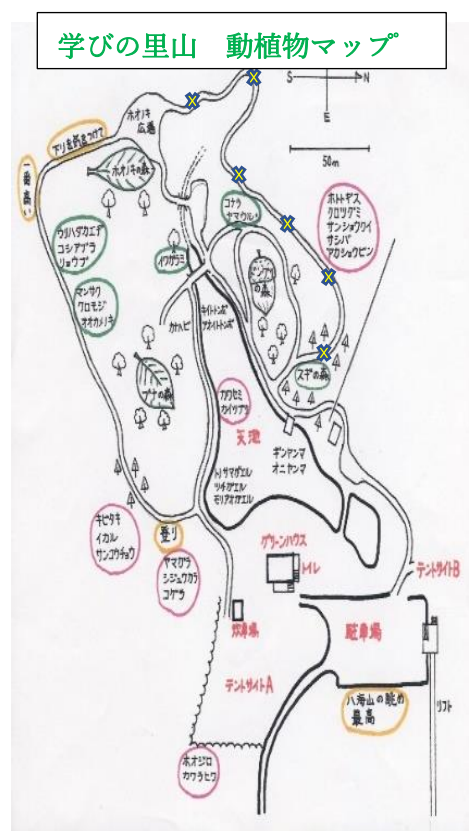
令和4年度

歩道や木橋、広場、案内板等のハード面の整備と並行して、組織キャンプや自然教室、里山塾の開催などのソフト開発も進めてきた。

小径や木橋、木道などが整いはじめ、そこに生息する動植物の調査も進み、基本となる「学びの里山」のルートマップがほぼ出来上がった。

また、より多様な人が散策しやすいように枝線的な小径、木道、木橋等や案内板、植物や樹木のネームプレート、解説板（例：希少生物、特徴的地勢など）を製作し、設置した。

これら里山の教育資源を利用するためのソフト開発も行った。8月には「自然観察」「林業体験」「なたやナイフの扱い方」「枝や木の実などを使ったネイチャークラフト」「飯盒を使って焦げずにおいしいご飯を炊く方法」「星座観察」「カヌー体験」などのプログラムを試行した。こうした活動について11月7日から30日まで南魚沼市図書館で「学びの里山 その自然と活動展」を開催し、公開した。また、3月初旬に「春を見つけに残雪を歩こう」というテーマで「里山塾（冬バージョン）」を試行し、多くの人々が参加した。「学びの里山」が団体や学校の自然体験教室などに利用されはじめて、確かな手ごたえを感じ少し、ほっとした。



3, 令和5年度に取り組んだこと

① 池を水上活動（カヌーや水辺の観察）用に整備する

春先には、池の水位は充分であったが、次第に水位が低下し、夏にはカヌーや水辺の観察は、難しくなった。しかし、秋には水位が徐々に戻り水上活動を実施した。



② 棚田の復活と 田んぼビオトープ

天池の南西の端で昔稲作をしていたと思われる「山田」が見つかった。地元の農家、高野さんによると、この場所でもずっと昔は田んぼを作っていたそうだ。里山の自然は水田とも深いかわりがある。私たちはここに田んぼを復活させて、昔の環境を再現してみようと考えた。

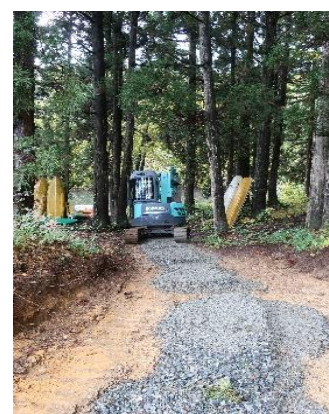


昔の田んぼには、周りに用水路があり、たくさんの生き物が棲んでいた。近代的な水田ではパイプラインで水が供給され、必要なときにだけ水が入れられる。周りの用水路には水は流れなくなり、水田の生物多様性は著しく低下してしまった。私たちは復活田んぼわきに、ビオトープをつくり、昔の田んぼの用水路を再現し、田んぼに生えていた植物を植え、メダカやゲンゴロウが住み、オタマジャクシが泳ぎ回る環境を維持しようと試みている。



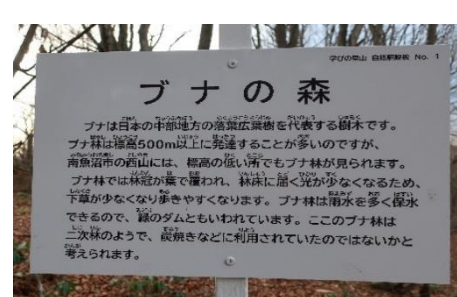
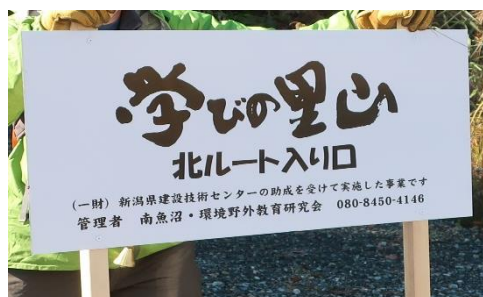
③ 公道とのアクセスの改良

軽トラック程度の作業車が「学びの里山」内に乗り入れできるよう公道とのアクセスを改良した。春に地ならしし、秋まで乾燥させた後、砂利を敷いた。一冬、雪の下に寝かせた。



④ 案内看板等の設置

施設名称や地図などの案内や注意喚起看板などを設置した。



⑤ 里山塾の開催

春、夏、秋、冬に「里山塾」を開催した。自然観察、カヌー体験、ネイチャークラフト、そり遊び、昔の里山の道具などいろいろ学んだ。参加者数は、4回の合計で子ども...126名 保護者...46名 スタッフ...39名だった。



へびを捕まえました。



⑥ 学びの里山オープンイベントの開催

令和5年11月12日(日) 「学びの里山」プレオープンイベントを開催した。

学びの里山

学びの里山が、五日町スキー場の天池近く、南魚沼市森林公園の隣にプレオープンします。

古いため池を囲むようにブナ、ナラ、ホオノキ林がある里山を、環境・野外教育の「学びの場」として整備する活動を、R3年から(一財)新潟県建設技術センターの研究助成を受け展開してきました。外周道路、小径、木橋・木道、広場などが整いはじめ、生息する動植物の調査も進み、基本となるルートマップ図や案内看板の設置も進みました。「学びの里山」での「里山塾」も順調に開催でき、加えて団体や学校の自然体験教室などに利用されはじめ、少し、ほっとしています。

南魚沼環境・野外教育研究会会員一同



里山の文化は宝物

南魚沼 子どもたちの学びの場整備



元教員ら五日町スキー場中腹に

キャンプ、米作りに活用

南魚沼市寺尾の五日町スキー場の中腹にあるキャンプ場近くの里山一帯を、地元に住む元教員らでつくる団体が、子どもたちが学んだり、遊んだりできる「学びの里山」として整備した。自然豊かな古里の良さを認識してもらおうとともに、里山の環境や文化を伝承したいとの思いから、下草刈りをしながら、木道や案内看板の設置などに取り組んできた。来春の完成を予定しており、子どもたちの自然体験学習の場として活用するほか、気軽に動植物を観察できる森とすることを目指している。

整備したのは「南魚沼環境・野外教育研究会」。会員は小中学校の元教員ら15人ほどで、2019年7月に発足した。地元の小学生らを対象に「学びの里山塾・デイキャンプ」と題して、季節ごとにスノーシューでのトレッキングや、カヌー体験、枝や木の実を使った工作などを展開している。研究会代表で東海大名誉教授の西野仁さん(77)は「南魚沼市五日町」は「古里の良さを伝え、地元を誇りを持つ子が増えれば、県外に

行ったとしても、いずれ古里に帰ってくると思う」と狙いを話す。学びの里山は広さ約2.5畝で、古いため池である「天池」を囲むようにブナやホオノキ、コナラ、ミズナラ、スギが生い茂る。昔は炭焼きなどが行われていたが、深いやぶに覆われた状態だった。研究会では21年から、「県建設技術センター」(新潟市西区)の助成も活用しながら、間伐や下草刈りに加え、木道や案内看板などを整備してきた。整備を進める中で、ぬかるんだ場所が100年以上前の田んぼ跡だったことが判明。その場所に田んぼを復元した。脱穀した穀物に交ざるわらくずなどを風の力で取り除く唐箕など昔の農具や民具も収集しており、「子どもたちに昔ながらの手法で米作りを体験してもらおうことも考えたい」と話す。

研究会では21年から、「県建設技術センター」(新潟市西区)の助成も活用しながら、間伐や下草刈りに加え、木道や案内看板などを整備してきた。整備を進める中で、ぬかるんだ場所が100年以上前の田んぼ跡だったことが判明。その場所に田んぼを復元した。脱穀した穀物に交ざるわらくずなどを風の力で取り除く唐箕など昔の農具や民具も収集しており、「子どもたちに昔ながらの手法で米作りを体験してもらおうことも考えたい」と話す。

研究会では21年から、「県建設技術センター」(新潟市西区)の助成も活用しながら、間伐や下草刈りに加え、木道や案内看板などを整備してきた。整備を進める中で、ぬかるんだ場所が100年以上前の田んぼ跡だったことが判明。その場所に田んぼを復元した。脱穀した穀物に交ざるわらくずなどを風の力で取り除く唐箕など昔の農具や民具も収集しており、「子どもたちに昔ながらの手法で米作りを体験してもらおうことも考えたい」と話す。

研究会では21年から、「県建設技術センター」(新潟市西区)の助成も活用しながら、間伐や下草刈りに加え、木道や案内看板などを整備してきた。整備を進める中で、ぬかるんだ場所が100年以上前の田んぼ跡だったことが判明。その場所に田んぼを復元した。脱穀した穀物に交ざるわらくずなどを風の力で取り除く唐箕など昔の農具や民具も収集しており、「子どもたちに昔ながらの手法で米作りを体験してもらおうことも考えたい」と話す。

30人を里山に案内した。「カタクリは日が当たらないと咲かない。里山を整備したら、春に咲くようになつた」など、研究会幹事長で高校の元生物教員、深澤和基さん(65)の解説を聞きながら、参加者は散策を楽しんだ。南魚沼市の上田小学校5年、小林頼叶君(11)は「自然豊かでない場所だと思つた。また来たい」と目を輝かせた。西野さんは「会員の多くは元教員で、子どもたちと接するプロ。夏休みを中心にキャンプを開くなど、自然に触れる場を提供していきたい」と話している。

新潟日報に掲載された「学びの里山」の活動紹介記事

2023年(令和5年)11月21日(火曜日) 地域16

⑦ 古い時代の農具や山仕事用具（鋤、ノコギリ、田植え枠など）、雨具（蓑、笠など）の収集と一部復元作業



4、3年間の総轄 「出来たこと、出来なかったこと」

出来たことについては、前述のとおりである。ハード面もソフト面も、何とか整いつつある。しかし、学校や団体などに施設利用を促すために必須なパンフレットや利用の手引きの作成までは手が回らなかった。加えて、研究助成終了後も「学びの里山」事業が継続できるように運営・管理システムを構築することについては、その必要性も認識はしているものの手つかずの状態にある。まずは、3年間の活動記録をまとめて関係団体・機関等に配布することを急ぐ。

5、これからの展望

1972年、ローマクラブが「成長の限界」という「人類の危機」レポートを発表しました。米国の国連大使A.ステーブソンが訴えていた「宇宙船地球号」という考え方が世に広まった年です。『我々は、小さな宇宙船に乗って旅行している乗客で、成長の限界に早く気が付き、「かけがえのない地球(Only One Earth)」を救うことを真剣に考えろ』という警告に、ドキッとしました。あれから50年、今、世の中は、地球規模の環境汚染問題で揺れています。ローマクラブの警告の重大さにやっと社会が気付いたものの遅すぎです。温暖化も、プラスチック汚染も、薬品の拡散も、人間の産業活動等によって引き起こされたものです。人の欲求・欲望が、「さらなる便利さと、効率」を求め続ける限り、この宇宙船に蔓延しかけている閉塞感は払しょくできません。もはや対処療法的な解決は望みにくく、むしろ人々が長い時間をかけて蓄積してきた「経験知」の中に、問題解決するヒントがあるように感じます。

私どもは、「ごくありふれた身近な里山で育まれた里山文化」を「学び合い、教え合い」しながら最適解を求めつつ大事に育て、次世代にも継承していきたい。その意味では、「学びの里山」は、学校とは言わないまでも、博物館・美術館相当の組織・機関に成り得るでしょう。そのお手本は、諸外国の公園にある「ビジターセンター」かもしれません。また、それは見方を変えると、参加者の実経験に裏付けられた、発信力のある広い意味での「メディア」かもしれません。

「学びの里山」整備はこれからも続けます。五日町スキー場の最高地点から奥の林道へとつなげ、さらに昔往来したという「塩の道」を復活し「妻有」地域まで歩道を延伸する夢もあります。

おわりに

3年間、お世話になりました。心から御礼申し上げます。みなさんのご支援なしには、本プロジェクトは机上の空論で終わっていたかもしれません。これからも、ゆっくりゆったり、歩み続ける所存です。今後とも、ご指導ご鞭撻をよろしくお願いします。

添付資料

